
第17章 聖徒の堅忍（牽引）

17.1. 神が、その愛する御子において受け入れるべき者を有効に召し、聖霊によって聖い者となりました。彼らは決して、全的にも最終的にも恵みの状態から墮落することはなく、キリストにあって終わりまで確実に堅忍（牽引）し、永遠に救われます（ピリピ 1:6、Ⅱペテロ 1:10、ヨハネ 10:28-29、Ⅰヨハネ 3:9、Ⅰペテロ 1:5,9）。

1 項にて、聖徒の堅忍（牽引）を、聖霊の有効召命と連結して説明しています。それは、キリストとの結合について、聖徒の堅忍（牽引）教理を述べるためです。聖霊が有効召命する中で聖なる性質を心に植えられるので、なお聖霊さまが、それを拡張させる御業によって決して恵みの状態から完全に、そして最終的に墮落することはありません。従って、まことに回心した者には、聖徒の堅忍（牽引）が適用されます。まことの信者は決して墮落に至らないです。それは父なる神の選びと、御子の贖いの働きが、聖霊によってすでに適用されているからです。そのうえキリストの執り成しと聖霊さまが常に内住しておられるからです。結局、聖徒の堅忍（牽引）は、有効召命によってキリストのうちにいる者たちに適用されるのです。信者は神の恵みによって保全 (preserved) されるだけでなく、信仰によって最後まで持続 (persevere) しなければならないか

らです。

聖徒の堅忍（牽引）に対する教えは、盲目的信者と形式的偽善者たちには適用されません。それにも関わらず、アルミニウス主義者は、信者自ら信仰を守り堅忍できると言い、まことの信者でも墮落することはあると教えます。また、教皇主義者とソツツィーニ派とクエーカー主義者みなは、完全にそして最終的に真の信者でも墮落すると主張します。このように聖徒の堅忍（牽引）教理に反対するのは、聖霊の有効召命とキリストの結合教理を受け入れないからです。

世代主義者は「肉的キリスト者 (carnal Christian) 」という用語を使用し、福音主義でも、「世俗的キリスト者 (worldly Christian) 」という用語を使用しながら、救われている者と見なしています。それは、キリストは告白するが、やはり肉的で、世俗的な人々として、救いの恵みがある者たちではありません。このような者は、結局、墮落するしかないのです。

17.2. 聖徒のこのような堅忍が、自分たちの自由意志にかかっているのではなく、父なる神の無償による、不変の愛から出る選びの聖定と（Ⅱテモテ 2:18—19、エレミヤ 31:3）イエス・キリストの功労の効力と仲保の働きと（ヘブル 10:10, 14、ヘブル 13:20-21、ヘブル 9:12-15、ロマ 8:33、ヨハネ 17:11、ルカ 22:32、ヘブル 7:25）、継続的な聖霊の臨在と彼らのうちに宿る神の種と（ヨハネ 14:16-17、Ⅰヨハネ 2:27, 3:9）および恵み契約の本質に掛かっているのです（エレミヤ 32:40）。これらは、彼らの堅忍（牽引）の明確さと、絶対的確實性を根拠とします（ヨハネ 10:28、Ⅱテサロニケ 3:3、Ⅰヨハネ 2:19）。

聖徒の堅忍において、人間の責任部分では最後まで耐え忍ぶことです。これは、人間の意志に依拠してできることではなく、信者が最後まで耐え忍ぶため

に努力する時、自分には能力がないことを認めるようになり、結局、神の恵みに依拠するしかないようになります。従って聖徒の堅忍の根拠は、父なる神の選びの普遍性と、キリストの功労と仲保の働きと、聖霊の内住、恵みの本質によることです。救いが、絶対的に神の主権に掛かっていることを証しします。一方、聖徒の堅忍において、人間の責任があります。勞し熱心でなければなりません。このような責任と言っても、人間が努力したから要求できるものではなく、人間に無能と弱さを悟らせて、恵みのうちに留まらせようとする手段です。それゆえ、キリストによって最後まで保全されるのは確実なことです。

アルミニウス主義者は、牽引が、人間の意志に掛かっていると主張しますが、誤りです。アルミニウス主義の反対と言える極端である道徳律廃棄論主義の教えからは、聖徒の堅忍（牽引）が神の主権に掛かっていると言いながら、自分を罪に放任させています。このような状態の会員は、まだ信者ではありません。また、聖徒の牽引教理を乱用して、自分は罪を犯している中にいながらも、自分は救われたと言います。これは、自分自らの偽り確信に過ぎません。18世紀のハイパーカルヴァン主義は、聖徒の牽引教理を乱用して、自分たちは罪を犯しながらも救われたと言いますが、誤りです。

17.3. それにも関わらず彼らは、サタンとこの世と誘惑と彼らの中に残っている腐敗性の勇勢さと、自分を保存させる手段等を見捨てることで、恐ろしい罪に陥り（マタイ 26:70, 72, 74）、しばらく間その中に留まります（詩 51:14）。そうすることで、彼らは神を不愉快にさせ（詩 64:5-7, 9、IIサムエル 11:27）、その聖霊を悲しませ（エペソ 4:30）ある程度の神の恵みや慰めまでも奪われ（詩 51:8, 10, 12、黙 2:4、雅歌 5:2, 4, 6）心を頑なにし（イザヤ 63:17、マルコ 6:52、マルコ 16:14）彼らの良心は負傷を受け（詩 32:3, 4、詩 51:8）傷つけられ、他の人々をつまずかせ（IIサムエル 12:14）、また自分に一時的審判をもたらします（詩 89:31-32、Iコリント 11:32）。

3項において、信者の敵が三つあることを明白にしています。信者を常に攻撃するのは、サタンとこの世と信者のうちに残っている腐敗性です。この三つは、信者に罪を犯すように常に誘惑します。従って信者は恵みの手段を続けて使用するべきです。その恵みの手段をおろそかにすると、罪を犯すようになります。そうすると信者は、しばらくの間、罪の中に陥ったりします。すぐさま、神は救うこともできますが、そのままほって置かれたりもします。罪のしつこさと深刻性を悟らせる方法でもあります。更に信者は、罪に陥り、霊的に後退する状態に至ったりもします。これは、聖霊を悲しませることであり、神の恵みと慰めから自分を遠ざけさせることです。このような場合、神は、彼らが悔い改めを成し遂げるまで、一時的審判を行い、神の懲らしめを通して悔い改めに導き、霊的更新に至るようになります。

この時、神のまことの民は、墮落に至るまでの罪は犯しません。ところが、もし信者だと言いながら墮落に至るのなら、彼は始めから信者ではなかったのです。偽善者でした。偽善者として恵みの姿をしていたが、恵みがないので、結局、墮落してしまうのです。ヘブル6章4-6節の場合は（いったん、光を受けて天よりの賜物を味わい、聖霊にあずかる者となり、また、神の良き御言葉と、きたるべき世の力とを味わった者たちが、そののち墮落した場合には、またもや神の御子を、自ら十字架につけて、さらしものにするわけであるから、ふたたび悔改めに立ち帰ることは不可能である）。聖霊の賜物を所有していたが、墮落する者の場合でも、始めから救いの恵みがなかった場合です。聖霊の賜物とは、聖霊の一般の働きから来ることで、救いの恵みとは区別されます。3項の説明から、まことの信者も墮落することができることを教えるアルミニウス主義は、誤りであることを知ることができます。